

# 小学校家庭科における栄養教諭，養護教諭と創る食の授業

## —授業実践における授業担当者の意識の変化—

小清水 貴子\*<sup>1</sup> 中路 知恵\*<sup>2</sup> 末吉 美智子\*<sup>2</sup> 林 明子\*<sup>2</sup>

### I. 研究目的

近年，食生活の多様化が進むなか，食環境は大きく変化し，生活習慣病など食を取り巻く課題が出てきている。2005(平成 17)年 6 月 1 日には食育基本法が制定された。食育基本法第 1 章第 1 条では「国民が生涯にわたって健全な心身を培い，豊かな人間性をはぐくむために，食育を推進することが緊要な課題」であるとし，「食育に関する施策を総合的かつ計画的に推進し，もって現在及び将来にわたる健康で文化的な国民の生活と豊かで活力ある社会の実現に寄与すること」が目的として掲げられている。

学校における食育推進の指導体制の整備として，2005(平成 17)年 4 月に栄養教諭制度が開始された。栄養教諭制度では，「食の自己管理能力」や「望ましい食習慣」を子どもたちに身につけさせるため，指導の推進の中核的な役割を担うものとして，栄養教諭を位置づけている。栄養教諭の職務は，(1)食に関する指導と(2)学校給食の管理が掲げられている。(1)食に関する指導においては，「肥満，偏食，食物アレルギーなどの児童生徒に対する個別指導を行う。学級活動，教科，学校行事等の時間に，学級担任等と連携して，集団的な食に関する指導を行う。他の教職員や家庭・地域と連携した食に関する指導を推進するための連絡・調整を行う」とされている。つまり，栄養教諭を中心として食に関する指導を行うことで，学校全体として体系的・継続的な取り組みを行うことが期待されている<sup>1)</sup>。

家庭科教育において，食教育は学習指導要領に明記され，戦後 1947 年から教科教育として食教育に取り組んできている。多数の研究や授業実践が展開され，教育内容の充実<sup>2)</sup>に取り組んでおり，栄養教諭制度に対する戸惑い<sup>3)</sup>は隠せない。日本家庭科教育学会では，中央教育審議会中間報告「食に関する指導体制の整備について(平成 16 年 1 月 12 日)」に対し，家庭科教育が担ってきた食教育の意義を主張するとともに，栄養教諭と棲み分けながら連携を図ることについて意見書を提出した。以上の経緯はあるものの栄養教諭制度が創設されたいま，学校教育における食教育をより充実させるために，家庭科教諭と栄養教諭はともに連携して授業を創っていかなくてはならない。

先行研究として，村上ら<sup>4)</sup>は家庭科教諭と学級担任にアンケート調査を実施し，栄養教諭創設により，教諭の食に関する指導の資質が向上したことを明らかにしている。また，鈴木<sup>5)</sup>は，栄養職員に対するアンケート調査から授業者と栄養教諭の相互理解が連携協力による授業づくりの鍵であることを明らかにしている。しかし，これらは教諭全体に対する調査であり，個々の教諭が授業実践を通して得る子どもたちに対する意識の変化や気付きは明らかにされていない。異なる立場にある授業担当者がともに授業を創り上げる作業

\*<sup>1</sup> 長崎大学教育学部

\*<sup>2</sup> 長崎大学教育学部附属小学校

は、授業者自身が自己の役割をとらえ直す機会になるのではないかと考える。授業実践を通して、何を感じ考えたのか、何を得たのか、授業者自身にもたらされた変化を明らかにすることは、今後の食教育においてよりよい連携方法を見いだすことにつながるのではないだろうか。そこで本研究では、栄養教諭、養護教諭とともに実践した家庭科の食領域の授業実践を通して、授業担当者にどのような意識の変化や気づきがあったのかを明らかにすることを目的とする。

## II. 研究方法

### 1. 研究対象および授業実施時期

研究対象は、国立大学法人附属N小学校に勤務する家庭科教諭、栄養教諭、養護教諭である。三者が連携した授業は、2007年7月、10月、2008年2月の計3回実施した。授業対象者は5年生32名（男子16名、女子16名）である。

### 2. 研究方法

家庭科教諭、栄養教諭、養護教諭の三者による食の授業を開発・実践した。中路、末吉、林が授業を行い、小清水は授業を観察した。本研究に用いたデータは、授業前の打ち合わせの記録、授業観察や児童の学習記録を用いた授業検討会の記録、および個々の授業者のふりかえりを記した記録である。これらのデータを用いて、小清水が三者の連携を客観的視点でとらえ、分析と検討を行った。

## III. 結果および考察

### 1. N小学校家庭科のねらい

家庭科でめざす子ども像は「家族の一員として、自らの力を発揮する子ども」である。2007年度は「自己生活力を高め、よりよい暮らしをつくりだす家庭科学習」をテーマに取り組んだ。ここでいう「自己生活力」とは、「自らの家庭生活の状況を認識し、よりよい暮らしをめざして、思考・判断し行動する力」である。自己生活力を高めるために、(1)家族の一員としての自覚、(2)よりよいものを選択する力、(3)生活に必要な知識・技能の三つの力を培うことをめざす。家族のなかの自分を知ることを出発点とし、自ら思考・判断を行い、よりよいものを見極める目を持ち、確かな知識や技能を身につけてこそ、生活実践力を高めることができる。

そこで、以上の三つの力を意識した授業展開を試みた。(1)家族の一員としての自覚を促すため、日々の学習で導入部分に意識的に家庭を見直す活動を行い、単元の終末で家族を意識した活動を取り入れた。(2)よりよいものを選択する力では、家族の生活スタイルは様々であることから、学習したもののなかから子どもが自分の家庭にあったものを選び、生かすことにつなげた。授業で具体的な生活場面を取り入れ、学習のふりかえりで家庭での生かし方を個別に考えさせ、実践に向かう手立てとした。(3)生活に必要な知識・技能の定着を図るために、専門的知識をもった人に授業に参画してもらい、子どもと出会わせた。専門家の知識や技、考え方に直に触れることは、子どもの学ぶ意欲を刺激することにつながり、基礎・基本の徹底を図ることができると考えた。

## 2. 授業における栄養教諭、養護教諭のかかわり

自己生活力を高める三つの力の、(3)生活に必要な知識・技能の定着を図ることを目的に、食の専門家である栄養教諭と連携し、より多様な体験的活動を組み込んだ。また、健康面から家庭生活を見直すことをねらいに、養護教諭に授業に参画してもらった。具体的な学習設計にあたり、(1)専門的見地から学習を見直すこと、(2)学校給食を教材化すること、(3)子どもと直接かかわる場を設定することの3点に留意した。

- (1)専門的見地から学習を見直すことについては、食領域の単元全体で栄養教諭や養護教諭が子どもとかかわる必要性を検討した。その結果、栄養に関する学習は栄養教諭と養護教諭の三者で、調理実習は栄養教諭と二者で、協同で授業を行うことにした。
- (2)学校給食の教材化では、各家庭の食生活は多様であるため、子どもたちに共通する食経験として給食を教材として用いることにした。学校で毎日食べる給食は、子どもにとって身近であり、栄養学習にとってよい教材であると考えた。
- (3)子どもと直接かかわる場を設定することでは、授業自体は家庭科教諭が進行するが、各場面で栄養教諭、養護教諭が講義や子どもと実習を行う場面を設定することにした。

## 3. 授業の展開

指導計画を表1に示した。栄養教諭、養護教諭がかかわった場面を示した。計3回の学習指導案は表2、表3、表4のとおりである。以下、各回の授業の実際について述べる。

### (1)第1回「食べ物の栄養を考えよう」

他教諭と連携した授業の実践経験は、家庭科教諭は1年目、栄養教諭と養護教諭は2年目である。三人で行う授業は今年度が初めてであり、緊張感がみられた。子ども2名と家庭科教諭、栄養教諭で行った弁当作りの実演は、目の前で料理の様子をみて、おいしい匂いを嗅ぎ、子どもの意欲・関心は高まっていた。子どもと教諭が一緒にお弁当を作る活動は家庭科教諭一人では難しい。栄養教諭との連携により可能になった活動であるといえる。

本授業の課題はつぎの2点である。第1は、時間が押し養護教諭が話す時間がほとんどなく、各立場が生かされていないかった。三者のかかわりが噛み合わず、一つの授業でありながら流れが途切れていた。各役割から一つのテーマに迫る方法を吟味する必要がある。第2は学校給食の取り扱いである。給食は専門家の緻密な栄養計算のもとに献立が決定されている。栄養の視点からみれば、家庭のお弁当は給食に叶わないだろう。そうした現実を踏まえた上で、給食とお弁当を比較しなければ、子どもの目に理想と現実を突きつけることになる。教材としての給食を子どもの生活につなげる手立てを考える必要がある。

### (2)第2回「野菜たっぷり健康生活」

本授業は、さらさらの血とどろどろの血の二つの血の流れを、手作り教材を提示することから始まった。子どもは血の流れの違いを視覚的にとらえ、授業への関心を高めていた。その後、クラス全員の4日間計12食の食事の野菜摂取量を調べた食事調査の結果を子どもたちに示した。食事調査の分析は栄養教諭が担当し、子どもの記録から摂取量を割り出し、各自の平均、クラスの平均を計算した。自分は野菜が足りているのか、子どもたちは興味津々で結果を手にしていった。連携により、こうしたきめ細かい教材研究が可能になるとい

表1 食領域の指導計画

		学 習 項 目	栄養教諭	養護教諭
食べ物の栄養を考えよう (全10時間)				
1 学 期	第1時	卵料理をみつけよう		
	第2・3時	卵の特徴を調べる		
	第4時	食品の栄養的な特徴を知る		
	第5時	栄養バランスのよい食事の取り方を考える		
	第6時	フライパンを使った卵料理の計画をたてる		
	第7・8時	フライパンを使った卵料理をつくる	○※1	
	第9時	家族の好みにあったアイデア料理を考える		
	第10時	食品の3つの栄養について理解を深める (本時)	○※2	○※10
野菜たっぷり健康生活 (全12時間)				
2 学 期	第1時	野菜の栄養と調理法 (本時)	○※3	○※11
	第2時	野菜と栄養の関係について調べる	○※4	
	第3・4時	包丁の使い方や調理用具の使い方を確認する	○※5	
	第5時	野菜サラダの作り方を考え、調理計画を立てる		
	第6・7時	野菜サラダを作る	○※1	
	第8時	野菜の栄養や特徴を生かした調理方法を考える	○※6	
	第9時	油いための作り方を考え、調理計画を立てる		
	第10・11時	油いためを作る	○※1	
	第12時	家族に野菜サラダまたは油いためを作る計画を立てる		
3 みんなそろって健康いきいき (全2時間)				
学 期	第1時	みつめてみよう、あなたの朝ごはん (本時)	○※7	○※12
	第2時	家族が喜ぶ朝ごはんを作る計画を立てる	○※8	

栄養教諭がかかわる場面

- ※1：安全面・衛生面での指導および技能面での支援
- ※2：栄養バランスについての全体指導
- ※3：食事調査分析、野菜の摂取量、データ提供
- ※4：野菜の栄養的価値についての全体指導
- ※5：包丁の使い方や計量の仕方などの技能面での個別指導
- ※6：給食残量調査の資料提供、野菜の特徴をいかした調理方法についての全体指導
- ※7：食事調査から朝食の傾向を分析、給食の主菜・副菜揭示資料準備
- ※8：栄養バランスや組み合わせについての個別指導

養護教諭がかかわる場面

- ※10：成長期の健康と食事との関係について全体指導
- ※11：野菜不足が引き起こす病気について全体指導
- ※12：健康を維持するための朝食の意義について全体指導



表3 第2回「野菜たっぷり健康生活」学習指導案

1. 本時のねらい

食事調査をもとに野菜の摂取状況を見つめ直すことで、野菜の必要性に気づき、野菜の栄養や調理方法について学んでいこうという意欲をもつことができる。

2. 展開

	子どもの取り組み	学習教材	教師のかかわり	
問題を つかむ ／	1. 本時のめあてをつかむ。  実演は栄養教諭と養護教諭の協力を得る	[学習材1] さらさら血とどろどろ血の模型	(T1:家庭科教師)健康な人の「さらさら血」と健康でない人の「どろどろ血」の模型を提示し、流れ方の違いを実演する。子どもは食事に問題があるという気づきをもつだろう。そこで、何が原因か問いかけ、栄養のバランスの乱れ、野菜不足が主な原因であることを押さえる。その後、あなたの野菜は足りているのかと投げかけ、本時のめあてにつなげる。	5
	足りていますか?あなたの野菜			
問題 を 追 究 ・ 解 決 す る	2. 野菜の摂取量について考える。	[学習材2] 食事調査用紙	(T1)食事調査の感想や気づきを話し合う。3つの栄養や食品数には着目するが、摂取量には意識が向いていないだろう。そこで栄養教諭が分析結果から、1日に必要な野菜の量について話す。	
	3. 1日に必要な野菜の摂取量と、自分の摂取量を比較する。	[学習材3] クラス平均量のほうれん草 [学習材4] 350gのほうれん草	(T2:栄養教諭)食事調査の1日に食べた野菜の量の学級平均を提示する。子どもが自分の調査結果と比較した後、1日に必要な野菜の量350gの数値を押さえる。実際の野菜で提示し、視覚的に量をとらえさせる。また給食の野菜の量にふれ、休日の昼食と比較させながら、再度、自分の食事の傾向を振り返る場を設ける。	
	4. 野菜不足が引き起こす病気について知る。		(T1)野菜不足の食生活が及ぼす身体への影響について、健康面から養護教諭の話を聞く場を設定する。  (T3:養護教諭)野菜不足の食生活が引き起こす病気について①心筋梗塞②脳卒中③がんを例にあげて話す。毎日350gの野菜をしっかり食べている人とそうでない人では、病気にかかる確率に差があり、将来の健康にも影響を及ぼすことをおさえる。	35
／ 振 り 返 る	5. 野菜のよさに気づく。	[学習材5] 野菜ジュース	(T1)簡単に野菜を摂取できる方法として野菜ジュースを提示する。栄養をジュースで摂取できるか、子どもに問う。ジュースにない野菜のよさについて栄養教諭が話をする場を設定する。  (T2)ジュースにない野菜のよさとして、①野菜そのものの味がわかる、②噛むことの効果、③香り、見た目、食感などを楽しむことができる、④栄養を取りすぎることがないことをあげ、栄養面の他に野菜は大切な効果をもつことをおさえる。	
	6. 今日の学習の振り返りをする。		(T1)ノートに振り返りを記述させる。感想以外に、これから学びたい内容や家庭で生かしたいことを記述させるようにする。その後、数名の子どもに発表させ、本時のまとめとする。	5

表4 第3回「みんなそろって健康いきいき」学習指導案

1. 本時のねらい

二つの朝食例を見直し、栄養バランスのとれた朝食を考える活動を通して、調和のよい朝食の取り方や役割について理解を深め、今後の生活に生かそうという意欲を高めることができる。

2. 展開

	子どもの取り組み	学習教材	教師のかかわり	
問題をつかむ	1. 本時のめあてをつかむ。	[学習材1] 3人の子どもの絵	(T1:家庭科教師)元気がなく、いらいらした表情のしょうた君と愛さんの絵を提示する。睡眠不足や食事が足りないなどの意見が予想される。そこで、例に示した子どもの朝食を実物と一緒に提示する。例示した朝食は、2学期の本学級の食事傾向から設定した。子どもは自分の朝食と重ね合わせるだろう。また元気なたくや君の絵を提示し、子どもの意欲を高める。	5
問題を追究・解決する	2. 調和のよい朝食の献立を考える。  3. できあがった献立を紹介しあい、朝食の取り方について理解する。  4. 朝食の役割について理解する。	[学習材2] 例の子どもの朝食を記したワークシート [学習材3] 給食の写真  [学習材4] 発表ボード  [学習材5] 朝食と体温の関係を示すグラフ	(T1)班で二人を元気にするための朝食を考える。朝食の問題点を出し合う。問題点を解決するためにどうしたらよいか、給食の献立を参考に朝食に付け加えたり、減らしたりして考える。子どもたちにわかりやすいように、給食の写真資料には、使われている食材とおおまかな量を示しておく。  (T1)班ごとに献立を発表する。問題点と改善した食品を選択した理由を明らかにしながら発表できるようにする。各班の献立に対して、T2(栄養教諭)が専門的な立場から講評を行う。よさを認め合うなかで子どもが理想の朝食の姿を描くことができるようにする。  (T2:栄養教諭)調和のよい朝食のポイントとして、①3つのグループの食品をそろえる、②ごはん(パン)とおかず、汁物や飲み物を組み合わせると必要な量がしっかりとれる、③旬の食材を食べる、の3点をおさえさせる。  (T1)「朝食はなぜ必要なのか？」と問いかける。朝食の役割について養護教諭が話をする場を設定する。	35
振り返る	5. 調和のよい朝食の必要性について考えを深める。  6. 自らの朝食について振り返る。		(T3:養護教諭)①寝ている間に下がった体温を上げ、身体を動かす準備をする、②脳のエネルギーであるブドウ糖を取り入れ、脳の働きを活発にする、③一日を元気にスタートできる、の3点について話す。  (T1)子どもが調和のよい朝食と元気な身体との関係について理解を深めるために、T2(栄養教諭)が話を行う場を設定する。  (T2)食品は組み合わせて取る必要があることを話す。  (T1)学習を振り返り、感想をまとめさせる。家族を意識した感想を取り上げ、次時に行う家族が喜ぶ朝食作り計画への意欲付けとする。	5

える。また、学習テーマに対して健康面から栄養摂取につなげ、専門の立場を生かしたアプローチが検討されていた。

課題としては、三人の授業者で話をつなぐことに焦点がおかれ、子どもが授業についてきていなかった。授業者のペースで授業が展開されており、子どもの意見を取り上げながら、つぎの授業者につなげていく余裕が必要である。本授業を検討した結果、第3回目の授業では、これまで学んだ知識を生かして、子どもたち自身が栄養摂取のあり方を考えられる学習活動を取り入れることにした。授業者は新たな知識を子どもに教えるのではなく、子どもたちの思考を支援する立場にたつような指導案を作成することにした。

### (3)第3回「みんなそろって健康いきいき」

既習事項を活用した授業で、子どもたちは学習活動に積極的に取り組んでいた。例示された子どもの朝食をどのように整えればよいか、子どもたちなりに一生懸命に考えていた。また、家庭科教諭、栄養教諭、養護教諭の連携がとてもスムーズであり、子どもの意見を取り上げながら授業が展開されていた。

とくに、養護教諭の「体温を上げるためにはブドウ糖が必要である」という話を受けて、家庭科教諭が「ブドウ糖がたくさん入ったおにぎりを食べていればいいの？」と投げかけた。クラスの中に同じ疑問を抱いた子どもがいた。そこで、栄養教諭が長縄飛びに例え、ブドウ糖を多く含む黄色の栄養素が長縄を飛ぶためには、縄を回す赤色の栄養素と緑色の栄養素が必要であることを説明した。イラストを用いてわかりやすく、子どもにも印象深く残ったと思われる。意見を交換することでアイデアがひらめき、子どもの理解を助ける教材開発を一緒に行うことができることも連携のメリットであるといえる。

## 4. 本実践に対する授業者の振り返り

授業実践を通して授業者が何を感じたのか、(1)子どもに対する見方の変化、(2)仕事に対する考え、(3)授業実践で得たこと、(4)大変だったことを中心に振り返り、記録した(表5-1、表5-2参照)。以下に、その結果を考察する。

### (1)子どもに対する見方の変化

家庭科教諭は着任したばかりである。担任からの情報と合わせて、授業を検討する際に養護教諭や栄養教諭からの情報が授業づくりに大いに役立ったという。子どもの家庭環境や普段の生活を知ることは子どもを理解することにつながる。また家庭科の学習では、家庭との連携が必要であり、保護者の協体制づくりの示唆を得ることができた。子どもに対する見方の変化については、家庭科教諭は学習理解の深まりを感じている。栄養教諭は給食を食する子ども一人一人に目を向けるようになり、養護教諭は子どもたちの授業の様子を知る機会になった。普段と違う立場で子どもとかわることは、子ども理解を深めることになる。つまり、学校全体で子どもたちの状況を把握することになるだろう。

### (2)仕事に対する考え

家庭科教諭は授業づくりにおいてリーダーシップをとらなければならないことを強く感じていた。また、家庭科の授業にも学習内容に深まりが出てきたと記述している。教育



表5—1 家庭科教諭、栄養教諭、養護教諭の振り返り（記録より抜粋）

	家庭科教諭	栄養教諭	養護教諭
子どもに対する見方	<p>○栄養教諭と養護教諭とのTTの授業では、明らかに子どもたちの興味関心は高まっていると感じる。授業中の子どもの表情や学習後のノート記述からも読み取れる。</p> <p>○この1年間TTという授業形態を積み重ねることで、子どもの食に対する意識は高まり、深い知識を身につけている。</p>	<p>○給食管理の上で人数把握をするため、学校全体や学級全体という形で、子どもたちをみていた(接していた)が、授業にできるようになってからは、一人一人を意識して見る(接する)ようになった。</p>	<p>○家庭科すべての時間、または食に関する領域のすべてに関わったわけではないため、大きく見方が変化したということとはとくにない。ただ、保健室を来室する子どもの授業の様子をじっくり見ることができた。</p> <p>○この学年は、保健室来室が少ない学年であることから、やはり授業態度が落ち着いていると納得した。</p>
仕事に対する考え	<p>○…栄養教諭や養護教諭がもつ、自分にはない専門的な知識を生かした授業をどのように仕組むかに時間を費やす。単元全体や一授業の中で、どの部分で栄養教諭を登場させたら効果的に学習ができるか、コーディネート的な役割がある。</p> <p>○TTで行う授業案を提案するのは家庭科教員であり、しっかり練り上げて提案しなければならぬ責任もある。</p> <p>○TTを仕組む時期に、栄養教諭や養護教諭は他の学校行事と重なる場合もある。そのため、学校全体の行事なども頭に入れながら、できるだけ負担のない状況でのTTを仕組むよう心掛けている。</p>	<p>○献立を作成するとき、栄養価や嗜好、作業工程、作業動線、価格など多くのことを考えているが、授業にかかわるようになってからは、教材としての献立を意識するようになった。たとえば、野菜のことについての学習に関わってからは、子どもたちが野菜を意識できるように、機械で小さく切っていた作業を手切りで大きく切るよう調理員に指示し、野菜が目立つようにした。</p> <p>○どのような内容を学習しているかがわかり、資料などが作りやすくなった。</p> <p>○周囲の先生方が給食指導(偏食指導・残菜指導)に積極的に取り組んでもらえるようになった。</p>	<p>○「小学校学習指導要領解説家庭編」を購入して、読もうと思った。</p> <p>○保健と家庭科のかかわりが大きい。家庭との連携が重視される教科であると改めて気付かされた。</p> <p>○5・6年生の保健室来室者に対して、食生活についての個別指導をする際に、理解を求めやすくなった。</p> <p>○小学校家庭科学習指導要領の記述<sup>※1)</sup>が、健康な生活を送るために必要なことと同じであり、家庭科領域の食・衣・住の全てが健康とつながっている。</p>

※1：「家庭生活を児童が改めて見つめ直したり実感したりすることによって、自分の生活の中から自分なりの課題を見いだしたり、その解決をしたりするようになる」(p.13)

「健康で安全に生きるためには、家庭生活をよりよくすることが大切であることに気付く」(p.22)

表5—2 家庭科教諭, 栄養教諭, 養護教諭の振り返り (記録より抜粋)

	家庭科教諭	栄養教諭	養護教諭
授業実践で得たこと	<p>○自分よりはるかに多くの実践をしてきた先生方と一緒に授業づくりができてよかった。</p> <p>○学校給食や, 食物がもつ栄養などについて, 深い知識を提供してくれる栄養教諭の存在, 健康な体について, 食べ物と関連づけて話題を提供してくれる養護教諭の存在は, 私にとっては授業づくりに示唆を与えてくれる大切な存在となっている。3人で行う授業実践は, この先, 自分自身の財産になると思うし, 他の教科においてTTを仕込む時のモデルになっていくものと考えている。</p>	<p>○子どもの様子が分かり, 献立作成に役立つ。</p> <p>○授業の進め方や発問の仕方など, 指導技術を学ぶことができた。</p> <p>○子どもとの距離が近くなってきた。お客様の存在だったのが, 教室にいても不自然でなくなった。</p> <p>○給食の味が薄いという子どもたちの意見(不平)に対して, 授業を通して, 薄味の良さなどを理解させることができ, 残菜量の減少へつながった。</p> <p>○保護者への講話などで, 子ども様子を交えながら話すことができるようになった。</p>	<p>○家庭科の内容を知ることが出来た。</p> <p>○一人職種であるため, 何事も一人で考えるより, 他教諭と協力する楽しさを味わうことができた。</p> <p>○学校保健委員会の取り組みの幅が広がった。平成19年度学校保健委員会の活動テーマ「心と体の健康を考えた基本的生活習慣を身に付けよう～食を味わい, 食を学ぶ, 学校給食を通して～」である。第2回の研修会では, 家庭科の授業「野菜たっぷり生活」を食育研修会として, 栄養教諭と連携で実施することができた。</p>
大変だったこと	<p>○複数で授業をするにはしっかり打ち合わせをする必要があるが, 時間の確保が厳しい。職員会議, 学年会, その他校務分掌関係の会議が毎日予定されている。1つのことを協力して創り上げるには, お互い気兼ねなく意見を出し, 指摘できる信頼関係を築くことが大切である。本実践で教師間もよい関係を築けた。そのことがよい授業づくりにつながり, 更に子どもにとってもよい影響を与えらると思う。</p>	<p>○とくに初めての単元や授業のとき, 準備(教材研究)に時間がかかり, 給食管理の時間が取れなくなった。</p>	<p>○家庭科の中で, 健康に関する内容をどこまで話をしたらいいのか, 授業の流れや時間的なことを考えながら検討する必要があった。その難しさを感じた。</p> <p>○養護教諭としての話の最初の出方や, つなぎ方, 話の仕方の難しさを感じた。</p>

と研究を担う附属の教員として, 家庭科教諭は本実践をつぎのように振り返っている。「附小の家庭科は1人であり, 全ての研究に関わる業務を1人で行わなければならない。…何から手をつけてよいかわからず, 戸惑うばかりだった。そのような時に, 栄養教諭や養護教諭と一緒に授業を作る時間をもつ中で, 学校や子どもの様子, 研究の流れなど多くのことを教えてもらった。研究を1人で背負わなければならない重圧で後ろ向きな考えばかりが浮かんでいたが, サポート役ができることでやらなくてはいけないという思いをもつ

ことができた。これが、仕事に対して前向きに取り組めるようになった大きな要因であると思う。」附属に限らず、家庭科教諭は一人の配置がほとんどである。教科の仕事がすべて自分の肩に掛かっている。同教科の教諭からの刺激が少なく、研究会に参加したくても仕事が忙しく難しい教諭もいる。目の前の子どもと一緒に見つめ授業を創る仲間を得ることは心強さを得るとともに、教材研究や授業の幅を広げることにつながるといえる。

栄養教諭は、献立作成や野菜の切り方などを配慮するようになったこと、学校で給食指導に対する意識が高まったことをあげている。養護教諭は保健室での子どもに対する食生活指導で理解を求めやすくなったこと、保健と家庭科のかかわりの大きさに気づき、家庭科への関心を示している。連携して授業を創ることは、一つの授業を生み出すだけでなく、自分自身の仕事に対する考え方に影響を及ぼしているといえる。

### (3) 授業実践で得たこと

授業実践で得たことは、家庭科教諭は(2)とも関連して授業づくりの示唆を得たこと、栄養教諭は子どもや保護者とのかかわりが深まったこと、また教諭として指導技術が向上したことをあげている。養護教諭は他教諭と協力して仕事をする楽しさを感じ、学校保健委員会の取り組みの幅が広がったと述べている。連携した授業づくりは仕事の負担増だけではない。その経験が個々の仕事に反映され、生かされる。また、お互いの仕事に対する理解を深め、関心をもち、自分の仕事との関連を考えるきっかけになる。つまり、協同で授業を創るプロセスは個々の仕事にプラスアルファを生み出すといえる。

### (4) 大変だったこと

授業実践で大変だったことは、打ち合わせの時間の確保、授業準備の負担、授業での立場や指導方法であった。(3)得たことと(4)大変だったことの記述量を比べると、大変だったことの方が少なく、大変ではあるが得ることが多かった様子がうかがえる。授業の背後には、綿密な指導計画や教材研究などの準備が必要である。校内の様々な仕事を抱える三者が、ともに会して検討を重ねる時間を確保することは容易ではない。しかしその積み重ねがあつてこそ、子どもの心に響く授業が展開される。学校全体で食育を推進していくためにも、校内で調整を図り、授業準備の時間を確保していくことが必要である。

## IV. まとめと今後の課題

本授業実践を通して、授業者の気づきや変化をまとめると、以下の3点である。

### 1) 子どもを多面的に観察し、理解すること

授業実践は子ども理解に役立っていた。複数の目で子どもたちを観察することが学習活動だけでなく、日々の学校生活における指導に生かされた。

### 2) 教諭同士のつながりが深まり、仕事に前向きな姿勢が生み出されること

家庭科教諭、栄養教諭、養護教諭は一人一人職種であり、孤軍奮闘している。授業づくりを通して三人の教諭は仲間を得、個々の仕事に対して前向きな姿勢を生み出していた。

### 3) 自分自身の仕事のとらえ直し、さらに充実させること

連携協力による授業づくりは、他教諭の仕事を理解するとともに、仕事における立場を再確認し、自分の仕事に対する見方に影響を及ぼしていた。それは、仕事の仕方の工夫、

子どもたちとのかかわり方、校外活動への取り組みなどに反映されていた。つまり、家庭科教諭、栄養教諭、養護教諭の三者がかかわる授業づくりは、家庭科の授業内容の充実だけではなく、授業者自身も得ることの多い取り組みであるといえる。授業を創る作業は、自身の仕事をとらえ直し、さらに内容を充実させることにつながる。また、授業を受ける子どもたちにとっても、授業者の連携協力により食教育の学習機会と学習内容が保障されるといえる。

今後の課題として、本研究は一事例研究であり、必ずしも連携がうまく進んでいる学校ばかりではない。授業は教師と子どもたちで創っていくものであるが、連携授業においては教員同士の人間関係も授業に大きな影響を与える。子どもの食を改善するために始まった連携であるが、授業を担当する授業者自身が満足のいく仕事にするにはどのようにすればよいのか、授業者の意欲が高まる連携のあり方について、今後、研究を進めていきたい。

最後に、今回の授業実践から他教諭と連携した食の授業のあり方について述べる。伊波<sup>6)</sup>も指摘するように、栄養教諭であるからといって栄養指導だけに限る必要はない。栄養教諭は日々の給食管理を担っている強みをもっている。それをもっと全面に出した指導が臨まれる。例えば、食材を選ぶ視点一つを取り上げて、そこには栄養のバランスだけでなく、毎日の献立の組み合わせ、子どもたちの好み、予算、旬の素材や地域の特産物の使用など、多くの条件が絡み合っている。栄養教諭の仕事そのものを教材にすることで、種々の条件を踏まえながら献立が決定されていくことを理解するだろう。また、栄養教諭だけでなく、給食の調理を担当する人の話を聞いて自分の食を支えている人がいることに気づいたり、給食室の探検を通して調理器具の役割や衛生管理の必要性を知るなどの学びも生まれるだろう。また、日々の残飯量を取り上げて、ゴミや環境問題、飽食と飢餓など、食べ物を大切にすることに気づく学習に発展させることもできる。また、本授業実践のように食の授業を進めるにあたり、養護教諭の協力を求めることも子どもたちの学習意欲を喚起し、学習を深化させるものと思われる。食べたものが身体でどのように働くのかを知ることは、自分で自分の健康を管理することにつながる。口内炎や便秘といった症状は子どもたちの関心も高い。医食同源の言葉にあるように、すぐに薬に頼るのではなく、自らの体調を考えて食物を摂取する視点を養うことが求められる。

私たちの生活はいろいろなことがらと絡み合っている。子どもたちの家庭の食生活は多様であるが、学校給食は子どもたちに共通の食生活である。校内にある食教育の素材に目を向けていくことで、身体も心も健康にする食生活の実現に向けて、食の授業ももっと広がっていくと思われる。

他教諭と連携して授業を行うことのメリットは、教師の人的資源が広がることである。個々のもつ専門性を押し出すだけではなく、協同で新しいものを創り出すことも可能になる。固定概念にとらわれずに視野を広げ、食生活全体を見通す力を子どもたちが養えるような授業展開が臨まれる。

## 付記

本稿執筆にあたり、長崎大学高度化推進経費「新任教員の教育研究推進支援経費」をいただきましたことを申し添えます。

#### 註および引用文献

- 1) 文部科学省の調査では、平成 17 年度は 4 都道府県 34 人、平成 18 年度 25 都道府県 359 人、平成 19 年度 45 都道府県 986 人の栄養教諭が配置されている。なお、本データは平成 17・18 年は年度末、19 年度は 9 月末日のデータである。
- 2) 高増雅子・足立己幸，小学生における中食・外食選択型食教育プログラムの学習効果に関する研究，日本家庭科教育学会誌 Vol. 50, No. 1 (2007/4) pp. 22～32 など，献立立案や食情報等に関する栄養摂取に関する指導法や教材開発，児童・生徒の食生活の実態や意識調査等，家庭科の食物領域に関するさまざまな研究が進められている。
- 3) 鶴田敦子，栄養教諭創設(案)の経緯から懸念されること，家庭科教育 78(3)，6～10，2004，家政教育社，渡辺彩子，家庭科における食教育と栄養教諭制度問題を中心として—2. 家庭科教育問題研究委員会，研究委員会の活動報告—，日本家庭科教育学会誌 48(2)，157-158，2005 などがある。
- 4) 村上亜由美・荒井紀子，栄養教諭の小学校配置による家庭科及び学級活動への影響—平成 17 年度福井県における家庭科主任及び学級担任への調査をもとに，福井大学教育地域科学部紀要 第 5 部 応用科学 家政学編 (45)，1～14，2006
- 5) 鈴木洋子，小学校における家庭科担当教員と栄養職員(教諭)の連携による食育の実態と課題，日本教科教育学会誌 30(2)，9～15，2007
- 6) 伊波富久美，“食育”と「家庭科教育」—リアリティーと具体性を伴った学びのための栄養教諭との連携，宮崎大学教育文化学部紀要 教育科学 16，123-135，2007